

## 「豊後日田における開発と水害の歴史

### ～日田の開発を支えた掛屋の役割と、日田文人の水害に対する見識を探る～

別府大学歴史文化研究所 研究員 橋本雅文

#### 1. はじめに

日田盆地は周辺の山々から水が流れ込み豊かな水が生活を潤すとともに、時には水害が人々の暮らしを押し流してきた。日田の歴史は開発と水害を繰り返した歴史といっても過言ではない。その日田の中で、近世を中心に開発を支えた廣瀬家をはじめとする日田掛屋や豪農と言われた人々の業績の跡をたどり、近世日田の開発が今につながることを明らかにしたい。そうした中、近世以降水害が多発する。その水害について多くの文人が日記や書簡などに残している。それを読み解くことにより将来の展望につなげたい。

#### 2. 掛屋など豪商豪農の開発

近世になると、これまで開発されてこなかった、日田盆地の中央湿地帯を水田にするための大規模な水路が開かれたり、交通網が整備されたりしていく。こうした開発を支えたのが掛屋をはじめとする豪商・豪農である。

①廣瀬家（博多屋）筑前黒田藩士…風呂元井路(1823)、小ヶ瀬井路(1825)、日田川通船(1826)、川原隧道(1854)、歌詠橋(1849)、金山道路(1862)、筑前千早新田(1834)、宇佐呉崎新田(1829)、久兵衛新田(1832)、廣瀬井出(1870)、府内吉兆原・庄ノ原開発(1842)他

②草野家（升屋）筑後草野領主 石川代官家臣矢野氏の婿入り…小ヶ瀬井路(1825)、筑前千早新田(1834)、「神測」通船安全祈願(1856)他

③山田家(京屋)始祖又左衛門祐閑京都より移住…小ヶ瀬井路補修(1840)、日田川通線(竹田河岸)、石坂石畳(1850)、加々賀鶴新道補修(1853)、「神測」通船安全祈願(1856) 他

④相良家（姫路より松平直矩に随行）…筏流し、日田杉植林他

⑤樋口家（系図によると木曾義仲の郎党樋口氏）…加々賀鶴新道(1806)、筏場眼鏡橋(1806) 他

⑥千原家(丸屋)筑後蒲池氏三井郡千原村より移住…岳滅鬼峠新道(1809)、歌詠橋(1849)、金山道路(1862)、出店橋他

⑦行徳家(筑前岩屋城主熊谷氏浮羽郡行徳に移住)…歌詠橋(1849)、小月橋(1849)、金山道路(1862)他

⑧手島家(伊予屋)讃岐国豊島城主豊島氏後大友氏家臣…小月橋(1849)、「神測」通船安全祈願(1856)他

⑨森家（鍋屋）毛利高正家臣…「神測」通船安全祈願(1856) ほか

#### 3. 水害に対しての文人の記録

新たな水路で田地が増え、新たな道路で交通網も整備され、山林には雑木が伐採され杉が植林されると、水害も度々起こるようになる。その記録が文化人の中にみられるようになる。

①新座兵部「大原宮日記二」

「天明八年(1788)六月四日乙未 大雨 当日、隈・豆田両河洪水、就中隈川朝五つ時方水増、四つに至りて水勢甚敷、若宮石壇三つ程に水かかり、若宮左の小家二軒流失、河原町拾軒流、萬やとなんいふ川辺土蔵之石垣崩レ、穀俵低よりぬけ出、そこにて流失と云、浄萬寺返之道より浦河原ニ水溢れ、下加隈の方へ返ス、田中町大船市中ヲ返ス、染や町、堀田町へ一面水流町裏石垣所々崩損夥シ竹田河原ニ積置財木凡一

万程流失、且上下井手村田畑、高瀬、新原其外、川辺之田地甚水損言語ニ尽し難し。

川下、入江村いかだ場家土蔵共に流、誠ニ川はじめての大水四十年來の洪水なりと云々、いかだ場長八と申仁、自分之財木式千程、家蔵ニ掛り家蔵共に不殘流失、日隈千兵衛田地三步通り相殘候由。」

②廣瀬淡窓「淡窓日記」「懐旧樓筆記」

「文化十一年（1814）七月十五日 自十三日夜 至是不止 河水漲る者丈餘 街上或有浸水者石松邑民某溺死」

「天保九年（1838）六月二十六日 先是霖雨 昨加以暴雨 今曉大水 豆隈両市至船行街中 蓋三十七年前 壬戌大水 以後乃有此事云 竹田人家漂没数家」

「享和二年（1802） 此年五月大水アリ 豆田街中 流水滔々トシテ 川ヲ成セリ 人家床低キハ 皆水其上ニノボル 大家ニテモ 長福寺及俵屋藤四郎カ家 皆水に浸サレタル分ナリ」

③廣瀬久兵衛「久兵衛日記」

「安政五年(1858)五月二十三日 大雨洪水雷鳴

一、今朝ヨリ強雨頗ニ降続候延花月川筋殊の外出水昼四つ時ヨリ八時頃迄ハ市中流水隱宅ハ床上四五寸位 本宅ハ庭上五寸位 通筋ハ水勢烈敷 通行出来兼候程ニ有田町辺ハ床上二十三尺有之松原土居かろのせの下押切田中出口ハ押流暫ハ通川出来不致 日田殿橋ハ南詰ヨリニタ間落入 上町橋ハ暫相凌 未下刻ヨリ水勢暫相減 夕方ハ平常の通ニ相成 右ニ付隱宅ハ勿論所々大損菜園等ハ目も不ら當次第田畑水押 岸崩等 所々ヨリ為知有之 本宅井戸も手届候迄ニ相成 水濁り砂こしして鍮水いたし候事

一、右の出水城内山ニ崩レ所出来の由川原町辺ハ水底ニ相成御陣屋ヨリ御世話有之候由町中水不上家ハわつかの軒敷大躰庭迄ハ押入候由の事

一、享和二戌年(1802)我等十三歳の時此筋同様の洪水有之 五十七年目ニ又如此玖珠川ハ出水大山川ハ為差義無之由依之隈川ハ平常の出水ニて別条無之事」

このように、近世後半になると数十年に1度は大洪水が発生すようになる。その原因について考察する人が出てくる。

④森春樹(1830)「亀山鈔」

「文政十一戊子(1828)八月九日の夜、同二十四日の夜の大風に古木を折弱きを倒し枝を吹き落とし杯してあさましきに成なりたり(中略)隈川水の昔とたがいて減したことを考えるに亀山下の瀬杯は四十年前に比べ見るに三分の一に減したり。尤此小股は、大牟川の水以前より増えて流るればなりと思ひしかのみならず上銭淵にても前々よりは大いに減したり。或は曰く上なる川筋の諸山杉材多く伐り出す故也。杉は水を出す木なるからは自然に溪々の水咽る理なりといへり。一渡り打聞きていかにもと聞ゆれども杉は伐れば其跡に挿つき植えつく故其苗年々に長るによりておいおい材となるを伐事なれば伐しても猶在理也頃所。しかれば此材木伐るのみの事にはあらん。又小ヶ瀬の新堰にせき止めて其水新原の下田中下にて大川に落ち入るは町の辺りそれだけの水は減る理なりといはんに此堰の出来しは今七八年の事也。惣ての水の減したるは其以前より也。溪々小河にて水の減るいわれは、天地の運候による成へしやいなや得てしるべからず。」

⑤広瀬旭荘(1858)「広瀬旭荘書簡」

「一、今度洪水の因ヲ考ニ 全山之木ヲ斬荒候よりと被察候 此跡ハ必灌水ニ因り候 凡伐木の時ハ暴漲涸水之二患ニテ 古田悉亡候様ニモ相成候 今度限りなればよし 追々度々漲涸のニテ田ハ必可損此事日田の盛衰ニ関係不少 官府並庄屋懇意の人ニハ我説ヲ御述可被下候 百年立候時ハ大衰ニ相成候萩の人六里四方ハ一草一木ヲも妄ニ伐らせず 佳氣滋養蔚葱 國之繁昌在此と誓候處 彼方も自古申傳

如此と候」

⑥筑紫花浦（筑紫哲也の祖父）

「山與水」「千山鳥飛絶萬徑 人蹤滅孤舟蓑笠翁 独釣寒江雪」

⑦後藤宗俊 2017) 講演「自然災害と文化財の保護」

「度重なる水害は昭和 28 年の水害とは様相が明らかに違ってきている。」

こうした文書を読み解くことにより、日田盆地の開発と水害の関係がみえてくる。

日田で杉の植林が始まり 50 年後、大原神社宮司の新座兵部は、急激に増水する洪水に「言葉では言いがたいほど」と驚き、100 年後、隈町の文人森春樹は三隈川の水量の減少を心配し、その原因が杉の伐採によるものではないかと指摘した。

さらに 124 年後、咸宜園を継ぐ広瀬旭荘は「洪水の原因は杉の全伐によるもので、杉山の伐採は洪水と渴水の二患を引き起こす。このことは百年後の日田の盛衰に関わる大事なことなので木を大切に育てることが国の繁栄につながる。」と明察している。

それでも、一般住宅の建物構造が掘立柱から貫柱へと変化することで、杉材の需要はますます増加した。木材を運搬するための道路の整備や木流しをしても壊れない石橋の建設とともに、杉の植林はますます進み、川沿いだけでなく山林の奥まで広がり広葉樹を席卷してしまうことになる。

戦後の復興、高度成長に伴う住宅の需要増で杉の伐採は進んだ。植林が始まって 219 年後、昭和 28 年日田市全体に被害を及ぼす大水害に見舞われる。その結果、川岸の家々は流失、撤去され、上流には下笠、松原の巨大ダムが建設された。

そして 280 年ほど経つ今、後藤宗俊氏が言うように「これまでとは様相の違う洪水被害」が起きている。人手不足の林業において杉の間伐を怠ったための流木による甚大な被害が起きる洪水である。これは、家屋も石橋も文化財もありとあらゆるものを押し流してしまう。これが、今起きている「様相が違う水害」というのである。

#### 4. おわりに

日田に住む人々は、繰り返される洪水に遭遇しながらも、水路を開き水田を開墾し水害を乗り越えて盆地の中に生活の場を求めてきた。そうした開発に伴い水害の様相は変化してきた。水路や交通網が整備され、水害が起きれば修復を重ねて生きてきた。

水害が頻発するようになると、江戸時代の文化人は水害の様相を記録し、100 年後 200 年後の日田の盛衰を展望した。彼らが残した歴史的記録と、そこに生きた人々が残した大地に刻まれた用水、田畑、道路、石橋・隧道、山林などが、将来の日田を展望してくれる。このような文化財から私たちが何を学んでいくかが問われている。